ちえおくれの幼児と幼稚園

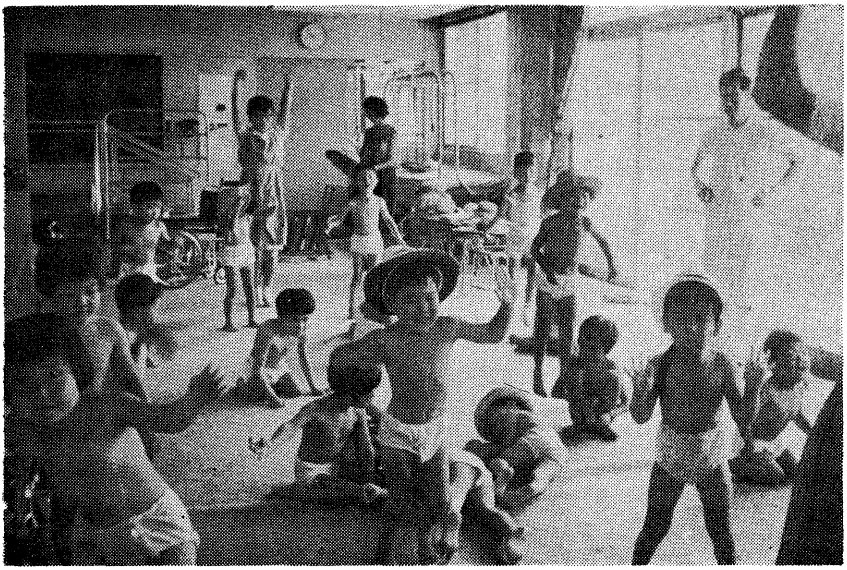
横木スマ子

普通児または、それ以上の知能の高い幼児を対象とする私どもの幼稚園に、はじめて知恵おくれのA子と自閉的傾向のあるBが入園して来たのは、一昨年のことである。その子どもたちの入った組の担任を仰せつかった私は、正直なところ最初は途方にくれてしまった。しかし以前から心身障害児教育に関心を持っていた私には、A子とBを受持つことによって、それが幸いともいえる意欲に満ちた日々になっていった。

昨今、一般的に一年保育は、やや軽視される傾向があるが、私どもの幼稚園では園長、主事をはじめ職員が皆一年保育の捨て難い良さを認め、また必要性を感じている数少ない幼稚園ではないかと思われる。現に私どもの園でも一年保育は募集の定員に満たないことが多い。A子とBが入園したのも、応募者全員を受け入れたからである。A子もBも健康に恵まれ、いわゆる中間児でその二人を含めた二十四名の保育がはじまった。以後は子どもたちと、手探りの保育者との生活の実践例と、それなりに、その場から生み出された一つの考えである。

※ 一学期

入園当初の期待と不安に満ちた子どもたちに、安定感を持たせるべく配慮をつねに念頭におきながら、私はまずA子とBの席を一斉保育をしなければならない関係上、担任にもっとも近い場所に決め、二列に並ぶ時も二人を最前列にしてつねに接触しA子とBを理解しようと努めた。同時に母親との連絡を密にして、集団の場と家庭との両面からA子自身、B自身をよく知りたいと思った。また他の子どもたちと、どのようにとけ込ませていくかということに担任として協力しようと思った。



写真(一)　身障者福祉センターにて　体操の時間

（A子）　五人家族、三人姉妹の末子で二人の姉も私どもの幼稚園を卒業している。軽いちえおくれから来た言語障害があり、週に二日市の身障者福祉センターへ通い、幼稚園には週四日の登園。母親への依存が強く甘えっ子である。母親は賢明な態度で担任とも積極的に協力し二人の姉たちにも協力をよびかけ、そのためにA子は明るく優しく素直に育っている。几帳面すぎる面もあるが、基本的生活習慣を身につけている。

しかし話すことに困難の伴うA子にとって集団生活は強い抵抗があり、むかえに来た母親の手を握る強さで母親はそれを感じとったという。しかし「食後のデザートのバナナも姉たちの分までは、どんなに欲しくても狙わなくなりました。朝の洗顔も姉たちの後にちゃんと並んで待つようになり、幼稚園に入ってから急に成長して身障者福祉センターでもその結果が表われ、訓練を受ける態度が変わって来たそうです」との、うれしい報告が聞かれるようになり、幼稚園でもだんだん担任の手を離れてお姉さん気どりの女児たちに手を引かれ、楽しそうに砂場あそびや、ままごとで、参加とはいかないまでも、友だちのすることを見て満足しているようすであった。

（B）　六人家族、兄姉弟が一人ずついる。母親はBを理解できず苦しんでいたのだろう。担任とあまり話そうとしなかった。

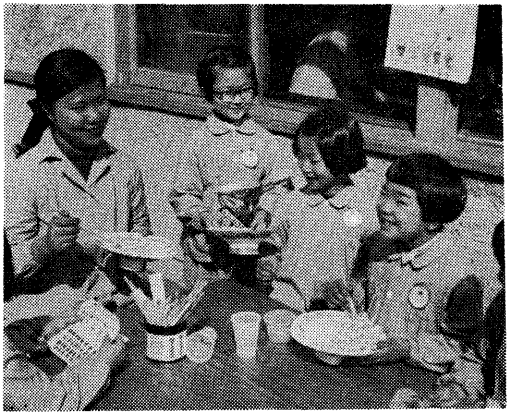
それどころか会うと「家ではいつも静かに地図をかいたり数字を書いて遊んでいるのに」と、自閉的傾向をむしろ賞賛し、園での同じ言葉を繰り返しどなったり多動的行動は心外だといわんばかりであった。母親と担任のそうした会話の翌日から、Bはますます荒れはじめ、その頃〝何とかしなくては〟と、意気込んでいた私は、すっかり自信を失なってしまった。

担任と視線を合わせることもなく、語りかけても全く関係のない言葉を繰り返す。珍しく手をつなぎに来てくれたと喜んだのも束の間、その握った私の手で自分の鼻をふき汗を拭う。この時のBにとって私の手はハンカチに等しかったのだろう。しかし絵画製作の場においてBはいきいきとし、驚くほどの能力を発揮した。

（組内の幼児たち）　彼らも四月は各自が自分のことで精いっぱいである。しかし一学期も半ばを過ぎる頃には、A子とBについて〝何だかようすが変だ〟という程度には感じていたようすも見えたが、具体的には表われてこなかった。

（担任）　担任である私はといえば、ちえおくれ、自閉症についてはテレビ週刊誌的知識しかなかった。その結果、なぜA子は自分の要求を、目（泣くことも含む）だけで訴えようとするのか。なぜBは椅子に腰かけないのか、また他人の物も自分の物も区別なく、欲しい物を友だちから取り上げるのか、察しはつくが理解に苦しんだ。そのために今考えると不適当な処置も多かったのではないかと反省している。

写真(二)　身障者福祉センターにて
A子（左より二人目）43年10月



写真(三)　幼稚園にて　44年2月
お店ごっこをするA子（右端）

※　反省と努力の夏休み

失敗と努力、努力と喜び。子どもたちにとっても担任にとっても、新しい経験の一学期は、母の日、父の日、遠足、夏の水あそび、

学期末保育参観日と、日を追い行事を追って、あっという間に過ぎてしまった。

私は一学期間、何をしたのだろう。とにかく勉強しなくてはと、夏休みを大切に使うことを心に決めた。まずA子の通っていた身障者福祉センターを訪問し、担当の先生と経過、今後の配慮について話し合った。また言語障害児教育講習会へ出席したが、これは初心者向きであって私はもっと、より深く勉強したいという意欲をかきたてられた。その頃、ある小児療育センターで募集していたボランティアの仲間に入り、心身の障害についてひとつずつ専門の先生から、実際に則した指導をいただく機会を得た（ここではBを中心に学ぶ）。

全体を通して夏休み中に学んだことは、障害児に対し特別な配慮はなされても、扱いは決して特別なことをするのではなく、普通児と同じように行なうということである。本質的には同じ人間の幼児であって特別なものだと考えることがおかしいのだという、しごく平凡なことであった。

※　二学期

子どもたちは心身ともに一段とたくましくなった。一名男児が転居のために退園したが、すぐにロンドンから帰国したばかりのU（彼は普通児ではあるが日本語が全くできなかった）が編入園し、人数の上では二十四名に変わりなく保育が始まった。

実践例　一　九月十二日　貼紙製作

形式からいえば一斉保育で、仕事のすんだ子どもたちは、他の組の先生が庭に出ていれば戸外の自由あそびに出し、A子、B、Uは個人指導をするという一学期と大して変わりばえのするものではなかった。戸外の子どもたちには担任としてすまない気持はあったが、A子、B、Uは三人三様の話し方をしながら、実に楽しそうに仕事をするようになった。三人がだいたいその仕事の意図をのみこんだ頃、一遊びした女児三人が何となく入ってきて声をかける。

女児たち「まだやってんの？　おそいわね―。あたしたちとっくにすんだのよ。ねえ」

A子「きれーにやってんだもん」と、本人はすましているが、どうみてもきれいだとは思えないというように、子どもたちはちらっと私の顔をのぞくように見る。

担任「いっしょうけんめいにやってるのよ。ほら、ここの色なんかきれいでしょ」

女児たち「そうね、ほんと。A子ちゃんがんばって」と、頭をなでてくれる子どもさえいる。その時、突然Bがどなる。

B「うるせーぞ」
U「ウルセゾウ」
B「ばかー」
U「ブガー」
女児たちは「きゃー」と、心得ていてうれしそうに逃げる真似をする。この時をとらえて担任「ねえ、先生は外にご用があるんだけど、あなたたち先生の代わりをしてくれないかな」
女児たち「いいわよ」と、目を輝かせて得意顔である。
担任「でもあなたたちが、この人たちの仕事をしちゃいやよ。わからないところがあったら教えてあげてね」
女児たち「うん」
私は、戸外の子どもたちの自由あそびに参加し、時々それとなく室内をうかがうと、私などよりずっと親切に、なごやかに作業が行なわれていた。またBとUは、この頃実に気が合い、BはUによって一歩正常化にむかい、UもBによって日本語を少しずつ覚えもした。

実践例　二　九月十八日　自由あそび

室内で自由画や粘土をしていたA子、B、Uの方をそれとなく見ながら、少し離れたところで四、五人の男児たちが、ある子どもは大声で、ある子どもは声をややひそめて話している。

「あの子たち、ばかだね」
「へんなことばっかり、いってるもんね」
「せんせいがしゃべってるときでも、かってに、うたってたんだぞ」
「かみしばいのときもあるいちゃってさ」
私は思わず、そのグループの方へ歩き始めた。とたんにサッと逃げようとする子ども、上目づかいに私の顔を見る子ども、無頓着な子どもら、各人各様である。
担任「ねえ、今の話もう一度聞かせて」と坐りこむと、こわい顔をしてただ首を横にふる者もいれば、黙って友だちの顔を見ている子どももいる。中で、悪びれない子どもが、
「あのね、あの子たちのこと、ばかっていったの。うちのおかあちゃんもいってたよ」
皆の目は、もう私の爆弾が落ちるのを覚悟している。その目を見て、この時ばかりは私も、ぐっとこらえた。
担任「先生はそう思わないわ。Bちゃんは時々わからないことをするかも知れないけど、絵やお仕事はとてもじょうずよ。A子ちゃんはお話はうまくできなくても優しいし、約束は一番よく守るし、スキップもじょうずでしょ。Uちゃんは日本語はわからないけど、英語はおとなよりうまいのよ。それに三人は一度もおもらしをしたことがないわ（これは一言多かった）。そして先生が

一番えらいとは思うのは、三人ともとても心がきれいなの」と、いっしょうけんめいに話した。皆、だんだんおだやかな顔になり、素直にうなずいた。私は彼らの目を見て、つくづく〝本当に叱らなくて良かった〟と思い、今でもあの時の男児たちのまじめな目の美しさを思い出す。

実践例　三　十月二日　お話玉手箱「アトリーの鐘」（童話をテープに吹込んだもので十五分間）

運動会の前後から、幼児は心身ともに急速な成長が遂げられる。テープに吹き込まれた童話を聞くということは、視覚からの補助の刺激がないため、ある子どもにとっては聞きとることに困難が伴う。私はこの日、A子、B、Uとあと二名の不適当と思われる子どもをつれて砂場へ出た。出る時に残る十九名の子どもたちに、信頼をもって話しした。

担任「先生と五人のお友だちは、砂場に行こうと思うの。それで皆に頼みたいんだけどね、このお話をよく聞いて、どんなお話だったか、後で先生と五人のお友だちに聞かせて欲しいんだけど……」

子どもたち「いいよ。せんせいいってきな」「よーくきいとくから、いってもいいよ」と、真顔で送りだしてくれる。私はテープをまわし始めると、すぐ五人をつれて砂場へ出た。だいじょうぶとは思っても、やはり初めてのことで気が気ではなかったが、五人の子どもたちは、この日ばかりは誰もいない砂場を独占して、のびのびとうれしそうだ。日本語がかなり上達したUだけは、

「センセー、ドシテ、ブグダチ（僕たち）ソトスルノ（外に出るの）？」と聞く。

「だってUちゃんたち、砂場好きでしょ」というと、単純に、「ウン」と納得して、遊び始める。

長いような短いような十五分が過ぎて部屋に帰ってみると、テープが終わって先生を呼びにいこうと、話し合っていたらしかった。私の顔を見ると一斉にしゃべり出す。皆の真剣な目と声の調子に、これは思わぬ収獲だったと、心から感謝の念が湧いてきた。後から手を洗って入ってきたBとUに、「ウルサーイ」と怒鳴られて、一旦静かになったが全員大笑い。砂場組の五人が席についたところで、

「それじゃ、ゆっくり初めから話して聞かせてね」と担任にいわれ、皆かわり合って話してくれる。先生の知らない、聞いていなかった話を、先生や友だちによくわかるように伝えたい。そのような子どもたちの気持が溢れていた。五人の子どもたちには、おそらく断片的にしかわからなかったと思うが、いきいきした子どもたちのふんい気に刺激され、自分たちも砂場でどんなことを

してきたかを、負けないくらい大きな声で話したのだった。

この経験によって、自分を積極的に表現しなかった子どもまでが、いきいきとその話し合いに参加したこと。思いがけない子どもが表現力に富んでいたり、鋭い感受性をもっていたりして、全く驚くべき発見を担任としてさせられたものだった。

こうして各々の個性がはっきり出てきた二学期は、集団生活のいろいろな経験を重ねながら、幼児一人一人が自分以外の友だちにも心を配り、自然に仲間意識をもってA子、B、Uの足りないところも、全く自然な形で補い合う姿を見ることができるようになった。

※　三学期

好むと好まざるとにかかわらず、あと正味二ヵ月半でこの子どもたちも小学校へ上がり、一組数十名の一員となる。いつものことながら、三学期は幼稚園生活の最後を充実させ、心ゆくまで楽しんでもらいたいと思う。しかし、ことにA子、Bのことを考えるといろいろ気がかりはあるが、最低これだけは身につけて卒業させたいと思う。（Uは三学期にはほとんど心配のない程度に日本語は上達した）

A子にはことに、他の幼児たちが親切でありがたいとは思うのだが、そのために本人は困った時、自分で判断をしなければならない時も、自分で訴えようとしないで、友だちの働きかけに頼って待つ傾きが強い。

Bは随分よくなり、担任とも視線が合うようになり、自由あそびでは鬼ごっこ等、集団ゲームにも参加するようになったし（ただしルールは理解できなかったが）、多少は友だちにゆずることも会得し、表情も随分豊かになった。しかしまだ聞くべき話の最中に、好き勝手なことをしゃべり出したりひとり言をいいはじめる。

しかし、これらの〃自分の考えや要求を行動や言葉で表現する〃〃相手の話を聞く時と自分が話す時のけじめをつける〃などということは、A子、Bにかかわらず全ての幼児が身につけなければならないことである。

実践例　四　一月から二月にかけて

私は組の幼児全員と話し合って約束をした。折紙や画用紙ひとつを配るにも、何を作るかを自分で決め、各自担任の所へ歩みより「○○をつくるから○○をください」といって、受け取る等々。

A子にとっては大変な努力を必要とすることであり、腰かけたまま泣き出した。担任や友だちに助けを求めていることは痛いほどわかる。私もそのような時、自分で自分がいやになり情なくて「いっそのこと、A子には特別に……」と、くじけそうになってしまう（とにかく泣いても、声が出なければ紙をもっている担任

のところへ来て、スモックを引っぱってくれるだけでも、自分の意思を行動に表わして欲しい)。しかし私は全員に向かって話しかけるのみにとどめ、

「ご用のある方は、先生のところまでちゃんとひとりで歩いていらっしゃいね」と、実に冷たかった。すると子どもたちの中から、

「はやくいきなさいよ」

「A子ちゃん、ちゃんとあるいてせんせいのとこにいきな」

「おやくそくだから、いかなきゃくれないよ」という、小さな声が聞こえた。何と優しい子どもたちだろう。この中のひとりは、実践例二の中の男児のひとりである。A子も友だちに勇気づけられ、時間はかかったが何とかひとりでやってきて、何とか要求をいい担任から紙を受け取り「心が強くなったのね」とほめられて、とてもうれしそうだった。

このようなことが幾度か繰り返され、家庭の協力も得て二月の中頃から、少しずつ(たどたどしくはあったが)要求が言葉で伝えられるようになり、急に口数を増してA子は成長した。

二月には楽しいお店ごっこをするために、組をあげて計画し話し合って、方法、準備、役割りを決める。幸い若い実習中のI先生を得て、いっそう組じゅうに活気があふれる。

各グループに分かれて、いろいろなお店の準備が始まる。そのグループの中でも、それぞれ仕事の分担がきめられ、A子は最も人気のあるラーメン屋のおそばを、紙を細く切って作っている。どの子がA子の分担をきめたのか何とも心にくい配慮に、私は思わずそのグループの顔を眺めてしまった。Bは魚屋の看板を、大声をあげながら作っている。

春も間近い二月の末、室内から庭まではみ出しての楽しいお店ごっこが、数日間くりひろげられた。(写真三)

こうしてその二週間後、A子もBもUも、先生方に一抹の不安を残して他の幼児たちと共に元気で巣立っていった。

※ 一年を通しあらためて幼児教育に想う

以上入園から卒業まで、四項の実践例をあげたが、いずれもちえおくれの幼児と普通児のかかわり合いのほんの一例である。私はあくまでも、現場のよき教師であろうと努力をしているだけの人間であって、幼児教育を高い次元で語ることはできないし、そのつもりもないが、保育歴十数年目にして、またこの貴重な一年間の経験により、今ひとつの想いに至った。

私が過去においておあずかりしてきたのは、普通児またはそれ以上の知能の高い幼児たちばかりである。これもひとつの幼稚園のあり方で、それはそれで良いのかも知れない。しかし人間の社会というものは、心身共にバランスのとれた人間ばかりではな

い。むしろ大なり小なりの欠陥をもった人間がほとんどともいえるのではなかろうか。それを個性として認め合い、各人各様の生き方をしながら、本質的には共通性をもつ人間同士として、互いに支え合って生きていかなければならないのではないか。

ならば、当然人格形成に大切な時期であり、最初の集団生活の場である幼稚園で障害児をも受け容れることは、全ての幼児にとって理想的な環境づくりになるのではなかろうか。

障害児を受け容れることは慈善幼稚園になることではない。彼らにとって理想的な教育は（広い意味の治療教育を含む）普通児の中に入れ、その子どもの能力よりやや高い環境や教材を与え、あきらめずに働きかけ育成を助けることだ。

普通児にとっては、障害のある友だちに対する考え方、態度、思いやりを毎日の生活の中で自然な形で身につけていく。また私も障害児を含む組を一年間担任したことによって、教師として実に多くのことを学んだ。というのは障害児を知ったことにより、普通児をより理解することができたことだ。これはたとえていえば、おとなを理解することは子どもをよく知ることに始まり、医師が人間の健康体を知らずして患者の病状を把握できないなどの、相関関係に似ている。

この一年間は暗中模索試みの一年で、未熟さ故あちらへこちらへとぶつかりながら、決して満足のいくことばかりではなかった。しかし障害児にとっても普通児にとっても、お互いにひとつ屋根の下で同じ幼児としての教育、しつけを受けたことはそれぞれがプラスであったに違いない。

「確かに理想的なことかも知れないが、実際にはいろいろと困難が伴う」との心ある園長先生、先生方のご意見が聞こえるようだ。だが、重症児はそれぞれ受容施設があるのに、ちょっとした配慮と個人指導をすることによって、のびる可能性のある中間児は行き場所がなく、家庭待機というのが現状である。幼稚園の対象となるのはこの中間児であって、幼稚園もこのことについて真剣に考えなければならない時期に来ていると痛切に思う。小学校に特殊学級があるならば、幼稚園はたとえ義務教育でなくても、彼らを受け容れる体制ができてしかるべきだと思う。

ただ私には、今のところ特殊学級のように別個に障害児のみを集め、独立したクラスにした方がよいのか、普通児の中にひとり、ふたりと入れた方がよいのか、個々のケースにもよるだろうがよく分からない。それに何でもかまわず、すぐにでも障害児を受け容れることが望ましいとも思わない。

今すぐとはいかなくても、十分な準備（園の体制、職員の心構えなど）を整えた上で、〝人間を大切にしよう〟とする進歩的な幼稚園ならば、きっとそのような姿に変わっていくのではないかと、祈らずにはいられない。